創元推理

1993年春号

二〇世紀精神と本格論争 戦後探偵小説論2 笠井潔

大量死と密室 クイーン試論I 法月綸太郎

カルトの迷宮 新本格派ミステリ論 増田順子

迫真評論連載

力作書き下ろし短編

●第三回鮎川哲也賞受賞作家受賞後第一作

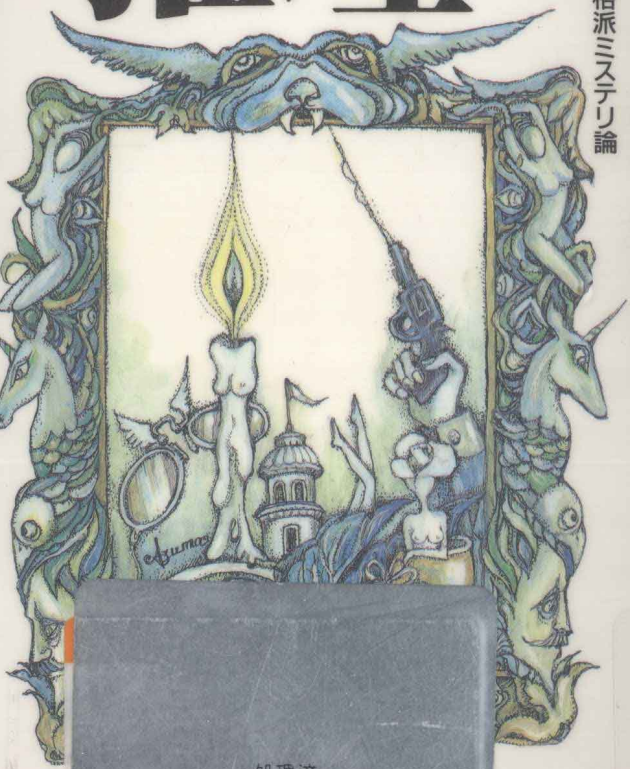
加納朋子［掌の中の小鳥］

篠田真由美［柘榴（マーテル・ドローサ）の聖母］

●江神二郎＝有栖川有栖の事件簿◆番外編

有栖川有栖［望月周平の秘かな旅］

山口雅也［禍なるかな、いま笑う死者よ］



処理済

COMICAL MYSTERY TOUR［[illegible]］いしいひさいち

東京創元社

創元推理

1993年春号

東京創元社

創元推理

1993年春号

■目次

掌の中の小鳥　加納朋子　5

望月周平の秘かな旅　有栖川有栖　38

石段　服部まゆみ　59

伊藤老人の小屋　山口光一　64

柘榴(マーテル・ドロローサ)の聖母　篠田真由美　88

閉じこめられた声　白峰良介　177

這う人　服部正　204

禍(わざわい)なるかな、いま笑う死者よ
――あるいは〈笑いの原理〉　山口雅也　237

八卦騒動　黒崎緑　306

大量死と密室——クイーン試論（I）　法月綸太郎　114
二〇世紀精神と本格論争——戦後探偵小説論2　笠井潔　263
カルトの迷宮——新本格派ミステリ論　増田順子　286
●
ハービー・クルーガーの涙　神山陽子　174
この十年間、どんなミステリが読まれてきたのか
——あるサークルにおける読書調査記録　164
●
COMICAL MYSTERY TOUR　いしいひさいち　162
ワニのバーナード　マリア・レイア　87
113
137
BOOKWORM　236
262
305
332
編集後記　336

表紙イラスト・渡辺東　表紙デザイン・小倉敏夫

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

掌の中の小鳥

加納朋子

SCENE 1

いったい何が嫌いといって、雑踏で突然背後から肩を叩かれることほど、嫌なものはない。

僕はその時、まるで深海魚みたいな呑気さで、人込みを泳いでいた。人々のささやき、笑声。誰かのウォークマンから漏れ聞こえる、音楽の破片。騒々しい宣伝文句。微かな香水や、パーマ液の臭い。氾濫する色、交錯する光。首の高さに堆積する、人間の呼気。

わだかまるそれらの間を、僕の思考はゆっくりと流れて行く。

その手はごく軽く、右肩に置かれたに過ぎなかったのだが、それでも僕を驚かせるには充分だった。瞬間、僕はさぞかし間抜けな顔をしたに違いない。釣り上げられた提灯鮟鱇そっくりに。

振り向くと、S先輩が立っていた。

「……お久しぶりです」

数メートル後方に置き忘れてしまったような〈日常〉を、用心深く手繰り寄せながら、僕は短く挨拶をした。S先輩は、軽く息を弾ませながら、僅かに苦笑した。

「お久しぶりです、か。相変わらずクールな奴だな。こっちは向こうからお前を見つけて、必死で渡ってきたってのに」

陽気に道の反対側を差した。歩行者天国の銀座にう

ねる、人、人、人。これだけの人間の中から、よくもまあ知った顔を見つけ出せたものだと舌を巻く。
「今日はお一人なんですか？」
彼の肩越しにちらりと視線を走らせて、僕は尋ねた。言外の質問を当然察したに違いないが、S先輩は曖昧に頷き、
「ちょっとうろついてみたくってね、銀ブラって奴さ。お前は？」
逆に尋ねたのが、やや彼に似ず性急な印象だった。
「僕もまあ、似たりよったりってとこですかね」
「ほんとかよ」
相手はかなり疑わしそうに、僕の服装を見やった。
「スーツ姿のお前なんか、初めて見たぞ」
「学生の時と一緒にしないで下さいよ。今じゃ僕も、バリバリのエリートサラリーマンなんですから」
「エリートだけ余計だろうが。馬子にも衣装ってか？」
そう茶化す彼の服装は、対照的にラフだった。洗いざらしのジーンズに、ポロシャツ、それにモスグリーンのセーターを無造作に羽織っている。学生時代と大差ない恰好だ。
四年、という歳月は、果たして長いのだろうか、それとも短いのだろうか。少なくとも外見上は、彼は最後に会った時と少しも変わらないように見える。単に服装だけのことじゃなく、例えば整った容姿も、引き締まった体つきも、やや皮肉をたたえた、しかし邪気のない笑顔も。
同じ四年間が僕の外側にどれほどの影響を与えたか、よくは分からない。だが、内側の変化は近頃とみに、いまいましく意識するようになった。
具体例を挙げるなら、あの頃は自分の考えを百パーセント示すのが、ベストだと思っていた。しかし現在では、十の内、口にするのはせいぜい三つまで、後は腹の中に留めておくのがベターだと知っている。
つまりはそんな類のことだ。
僕たちはごく当然の成り行きで、連れ立って近くの喫茶店に入った。ほとんど奇跡に近いことだが、すぐさま空席に案内された。
コーヒーを注文し終えると、僕らの会話も弾み出した。四年ぶりに再開した、大学の先輩後輩の間で取り交わされるにふさわしい会話――多くはそれぞれの仲間たちの近況――である。そしてまた、それは（恐らくは互いにとって）全くどうでもいい会話でもあった。

友人の結婚披露宴でのハプニングを話題に、ひとしきり笑った後、僕はほんの社交辞令のような調子で尋ねた。
「それはそうと、容子さんは……奥さんはお元気ですか？」
「まあね」
軽く答えると、S先輩はライターをやたらにカチカチいわせながら、煙草に火をつけた。
「しばらく禁煙してたけど、結局、また始めちまったよ」
言い訳のように言いながら、曖昧に笑う。
「へえ、禁煙をね」
阿呆のようにぼんやりと、僕は相槌を打った。一筋の紫煙が、二人の間にゆらめいている。質問を不器用にはぐらかされたことへの不満はあったが、自己嫌悪の方がより上回っていた。
実を言うと、ここひと月ばかりの間に計三度、僕は容子からの電話を受けていたのだから。全て留守番電話に記録された、一方通行の声ばかりだったが。
なんとはなしに沈黙が流れ、僕は容子からの奇妙な伝言を、そっと胸のうちで反芻してみた。

『……ただ今外出しています。御用のある方は、発信音の後に、メッセージをどうぞ』
僕が留守番電話に吹き込んでいるのは、そんなごくありきたりの文句だ。加えて言うなら、愛想も糞もない、ぶっきらぼうな口調である。好きでそうしているわけではなく、自然とそうなってしまうのだから仕方がない。しかし、そのせいかどうか知らないが、テープの声を聞き終えるなり、いきなり電話を切ってしまう奴が随分多い。気持ちは分かるが、これでは留守電の機能を果たさない。
最初、そうした罪のない無言電話のひとつかと思った。スイッチを切りかけた時、息づかいのような気配を感じ、思わず手を引っ込めた。そして、長い、ためらうような沈黙の後で〈声〉が聞こえてきた。
「……私よ、分かる？　もう、忘れちゃったわよね」
柔らかなアルト。けれど少女のような声。忘れはしない。どうして忘れることができる？
再び短い沈黙。微かな呼吸の気配。
「元気でいる？　私は……そうね、もう死んでいるわ。私……コ・ロ・サ・レ・タ・ノ」

無音。唐突に切れた、一方通行の会話。その日一件だけ記録された、奇妙なメッセージ。

「……私、殺されたの」

「……私、殺されたの」

「……私、殺されたの」

再生ボタンを押す度に繰り返される、同じ言葉。氷壁に反射する、冷たいこだま。

殺された？　彼女が？　誰に？

それではこれは、幽霊からの伝言か？　殺されて、冷たく蒼く横たわる容子の幽霊からの、メッセージ……。

馬鹿らしい。僕は首を振った。これは彼女のほんの悪戯に違いない。あの子の気まぐれな思いつき。彼女一流の、少しばかり悪趣味な、ゲームなんだ。そう考えようとした。

だが、ゲームセットを告げる権限は、僕の方にはない。彼女のゲームは、翌日も続けられた。

「……私、殺されているのよ。毎日、毎日、少しずつ、ゆっくりと、ね」

機械から再生される、容子の声。彼女が今どうしているのか、何を考えているのか、推し量る術のない、無表情な声。

そして昨日、三度目の電話。

「私、雲雀になれなかったの」

短い笑い声。決して楽しげな声でなく、自嘲を含んだ虚ろな響き。この最後のメッセージが、一番短かった。そして一番、僕の感情を揺り動かした。それはひとつのキイ・ワードだったから。

雲雀。雲の中で、自由にさえずる小鳥。

漸く忘れかけていた、いや、忘れようとしていたある記憶を、このちっぽけな鳥の名が、鮮やかに呼び覚まそうとしていた。

まだ学生だった頃のことだ。S先輩は四年に、彼女と僕が三年になったばかりだった。

〈青春〉という言葉が、自分たちの為に用意されている、などとはまるで考えなかったあの頃。気恥ずかしさから、遠く向こうに放り投げていたその言葉こそが、当時の僕らの状態そのままだった。それが文字通り〈青い春〉なのだと、今更のように気づくのだ。

苦い春。

不安定な、青。

「いい？　コバルト・ブルー、セルリアン・ブルー、ウルトラマリーン」
「ウルトラマン、ウルトラセブン、ウルトラマンタロウ」
　次々に目の前に銀色のチューブを並べて見せる彼女に、僕は軽口を叩いた。容子は軽く叱る目つきをし、「ターコイズ・ブルー、プラッシアン・ブルー、インディゴ・ブルー、パーマネント・ブルー。ね、一口に青って言っても、たくさんあるんだから」
「成程ね」
「じゃ、次はグリーンね。ビリディアン、エメラルド・グリーン、コバルト・グリーン、カドミウム・グリーン、クローム・グリーン。残念ながら、ここに置いてあるのはこれだけ」
「てことは、まだ他にもあるのかい？」
「グリーンはすごいわよ。絵具屋さんの儲け所って言われているくらい。クローム・オキサイド・グリーンでしょ、テール・ベルト、サップ・グリーン、オリーブ・グリーン、コンポーズド・グリーン、それから……」
　好きな食べ物でも並べ立てるみたいに、容子は嬉しげに羅列してみせる。耳に心地よい、アルトの声だ。
「白は？」
　そう尋ねたのは、明らかに白のチューブは本数が少なそうだったからだ。その代わり、やけに大きなチューブだが。彼女はやや残念そうに、かなり使い込んだそのチューブを取り上げた。
「白は大してないのよ。シルバー・ホワイト、ジンク・ホワイト、ここにあるのはこの二種類だけ。他にもあるけどね」
「白は白だろう？　同じに見えるけどなあ」
　僕は二つのチューブのラベルを見比べた。ブルーやグリーンに様々な色調があるのはまだ分かるが、何だって白に種類があったりするのだろう？　そこのところが、どうも今一つ呑み込めなかった。
「シルバーは、あまり素人向きじゃないけどね」
「へえ、油絵具にも、プロとアマの差があるのかい？」
「そんな大袈裟なものじゃなくって。色々理由はあるけど、ジンク・ホワイトの方がずっと安いっていうのが、一番の理由かな」

「成程、そりゃ切実だ」
もっともらしく僕は頷く。
「イエローはどう？」
彼女は嬉しげにレモン色のラベルが貼られたチューブを取り上げた。
「そう言うところを見ると、黄色も多いんだろう？」
「当たり。十種類くらいかな」
行儀よく並んでいるチューブを、彼女はざっと目で追った。
「今持ってる奴は、レモン・イエローだろう？」
「そうよ、よく分かったわね。シトロン・イエローとも言うけど。後はイエロー・オーカーでしょ、カドミウム・イエロー、オーレオリン……」
「オーケー、オーケー」僕は苦笑して手を振った。「絵具の名前を覚えるだけでも一苦労しそうだな。何だってこんなにたくさんあるんだ」
僕が知っている色の種類は、せいぜいが小学生の絵具箱の中身と同じ、十二色くらいのものなのだ。
「あら、だって」容子は微笑んだ。「世界が色で構成されているからに、決まっているじゃない？　絵を描いているときよく思うんだけど、この世にあるものは何でも、色で表現できるのよ。どんなものでも、その本質を表すイメージカラーがあるっていうか」
こんな時、彼女の口調はきらきらと雲母のように輝く。僕は眩しい思いで相手を見つめつつ、尋ねた。
「それは人間もかい？」
「勿論よ。そうね、あなたはピーチ・ブラックね。これは桃や杏の種の炭で出来ているのよ。ブルー・ブラックとも呼ばれてて、少し青みを帯びた、きれいな黒よ」
「それじゃ、君は？」
何気ない僕の問いだったが、彼女はしばらく悩んでいた。ややあって、ぽつりと答えた。
「ウルトラマリーン、かな」
「ああこれだね、ぴったりだ」
僕は頷いた。チューブから絞り出されたその色は、僅かに紫がかった、美しい濃青色だった。
実際のところ、僕は油絵はおろか、美術一般に関してはろくな知識も審美眼も持たない。だが、それでも彼女の才能は本物だったと、自信を持って断言できるのだ。
彼女の絵には、不思議な魅力があった。線や面の構

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

成に、どこか可愛らしいリズムがあり、その独特な色彩の選び方には、一種不安な美しさがあった。
「才能があるよ、本当に。僕は芸術には門外漢だけど、素人を惹きつける力があるっていうのは、本物なんだと思うよ」
あまり正面切って人を褒めることのない僕だが、彼女の絵に対してだけは、何の躊躇もなく賛辞を呈することができた。
そんな時、彼女は必ず、少し困ったようなはにかんだ笑顔を僕に向けた。

僕の在籍していた同好会に、S先輩はいた。学園祭の時、彼は何かのつまらない用事で僕を捜していた。そして見つけた場所が、アートクラブだったというわけだ。S先輩の用事というのが一体何だったのか、僕は未だに知らずにいる。
容子を一目見た瞬間、彼の頭からは一切の瑣末な事柄が綺麗さっぱり姿を消してしまったに違いない。皮肉と言えば皮肉だが、どういうわけか、僕はこの成り行きを恨む気にはなれない。多分、S先輩の容子に対する思いが、あまりにもあからさまで、そして純粋だったからなのだろう。
彼は容子の絵など、まるで見ようともしなかった。ただひたすら、彼女だけを見ていた。最初から終わりまで、ずっとそうだった。
「こいつがちっとも自分の持ち場にいつかないわけが分かったよ」
彼は僕の肩に腕を回しながら笑った。「アートクラブにこんな可愛い子がいたなんてな」
彼女は、僕に対するものとはまた別な、困ったような微笑を浮かべていた。僕は先輩の腕の重みを肩で受けつつ、ある予感のようなものを確かに感じていた。
結局、縁がなかった、というやつだ。
二人がつき合っている、という噂を耳にするのに、大した時間は必要としなかった。
だがそれは、その時点ではあくまでも無責任な噂の範疇を出なかった。事実、S先輩は始終僕にこぼしてさえいたのだ。
「なあ、おい。あの子をイーゼルの前からひっぺがすには、どうしたらいいと思う?」
僕は笑って首を振るしかなかった。彼は非常に頭のいい男であったにも拘らず、時として信じ難い程に無

邪気、かつ鈍感な一面を見せた。僕がどうしてもS先輩を嫌いにはなれないでいたのも、彼のそうした純粋さを、羨ましくさえ思っていたからなのだろう。
もしあの出来事さえ、なかったならば。

先輩がこぼしていたように、その時容子は新しい作品に、一心に打ち込んでいた。
彼女は傍らに、作品を飽かず見つめる僕がいようが、容子を熱心に見つめるS先輩がいようが、まるで頓着しないように見えた。どこか思いつめたような表情で、ひたすら眼前の作品世界へ没頭していた。そんな彼女のぴんと張りつめた横顔は、はっとする程に美しかった。そして出来上がってゆく作品は、それ以上に美しかったのだ。
あの時の彼女の作品は、間違いなく傑作だった。
薄めたペインズ・グレーで書かれた描線に過ぎない時ですら、僕はそれを確信していたような気がする。
デッサンの確かさ、軽やかなスピード感に溢れた描線、全体の構図の面白さ。僕はわくわくするような思いで、彼女の作業を見守っていた。容子がキャンヴァスに入れる一筆一筆は、それだけ作品を完成へ、そして完璧へと、近づけていた。
よく使い込まれた筆先は、たっぷりとペインティングオイルを含み、数種類の絵具を丁寧に混ぜ合わせた。ゆるめに溶かれたその絵具は、思いがけない表情でキャンヴァスを彩った。日が経つにつれて、その表情も刻一刻と変わっていった。最初、鮮やかな赤だった部分が、翌週には輝くような白に変わっていたりした。
「こうやって色んな色を重ねていくと、出来上がった絵に奥行きと深みが出てくるのよ」
容子のそんな説明も、どこか上の空だった。矩形に切り取られたキャンヴァスだけが、その時の容子の世界の全てだった。
容子の世界、容子の描く絵の一番の魅力は、多分その独特な色遣いにあった。とりわけあの時の絵のように不思議な色合いを、他で見たことがない。ブルーやグリーンなどの寒色系を好んで使っていたにも拘らず、ふわりとした暖かみを感じさせる色彩だった。精妙で美しい、色の氾濫。それらの微妙な色が、繊細な構成の中で複雑に絡み合い、危うい均衡を保っていた。
これ以上筆を入れたら、絵が駄目になる、死んでしまう。そうしたきわどい瞬間に、彼女は静かに筆を擱

いた。
ラフデッサンの時からずっと見守っていたにも拘らず、僕は感嘆の思いを込めて、完成した作品を改めて眺めやった。
まず目に飛び込んでくるのが、はっとするほど美しいブルーだった。容子の空想の空。この世のどこにもない空。胸に突き上げてくるような、憂いを含んだ鮮やかな色調。そのブルーの中に、鮮烈なグリーンや、眩いイエロー、輝くホワイトが、涙で滲んだ風景のように踊っていた。
全体の印象は、どこかシャガールを思わせる。一枚の画布の中で、空と森と街とが、混沌としていた。可愛らしいリズムと、一定の秩序とを、魔法のように保ちながら。そして、全体に浮かび上がる、一羽の鳥のイメージ。ちっぽけではあるが、空高く羽ばたく、力強い翼と、美しい声とを持った、一羽の小鳥。
「タイトルは、『雲雀』にしたわ」
完成の後の虚脱からか、抑揚のない声で容子が言った。僕は声もなく頷き、しばらくしてから漸く言った。
「素晴らしいよ、本当に」
いつになく言葉の少ない、だが、最高の熱意を籠めた賛辞に、彼女はいつものあの笑顔を見せなかった。容子はポリエチレンの筆洗いで、必要以上の時間をかけて絵筆を洗っていた。そして筆に付いた鮮やかなブルーが、灰色の澱となって沈殿していく様を、ぼんやりと眺めていた。
容子は完成した作品を、翌年行われるコンテストに出品するつもりだ、と言った。規模は小さいが、権威のある美術展だった。
「あの作品は本物だ。傑作ですよ。必ず入選しますね。一躍容子の名が有名になるのも、夢じゃない」
僕はS先輩に、熱心にそんなことを言った。何かの意図があって、そんなことを口にしたものか、自分でもさだかではない。しかし、相手が端正な顔をしかめたので、やはりな、と思ったことは事実だ。
彼は容子が若手女流画家だとか何とか言われ、ちやほやされることなんて、決して望んでいなかった。彼が好ましく思っていたのは、しとやかで平凡な容子だった。
嫌な顔をするS先輩を見て、僕は内心せせら笑っていた。彼は結局容子のことなんて、何一つ理解しちゃ

いない。自分の望むファインダーを通してしか、彼女を見ようとはしないのだ、と。

そんな苦い優越感で、僕は一体何を誤魔化そうとしていたのだろう？

作品を仕上げた容子は、しばらくアートクラブに足を踏み入れようとしなかった。彼女の『雲雀』は、画面を内側に四隅をクリップで留められ、クラブの片隅に仕舞い込まれた。そんな狭い空間に押し込められて、小鳥もさぞかし窮屈だろう。そんなセンチメンタルな感想を、僕はその時抱いた。

そして、事件は起こった。

あれは生暖かい春のことだった。桜が、曖昧な微笑みのように咲きほころぶ頃。春の霞の中に、奇妙に生臭い臭いが紛れ込む。

記憶の中だけの、腐臭。

どうした成り行きからだったか、その時容子と僕は連れ立ってアートクラブを訪れた。容子が古い鍵で、きしんだ音を立てるドアを開け、先に中へ入った。

続いて入った僕は、むっとする臭いに押し包まれた。薄く積もった埃の臭い。亜麻仁油の臭い。テレピン油の臭い。これらの油の刺激臭を、僕は決して嫌っていなかった。これは容子の世界の臭いだった。容子の住む宮殿の空気と、同じ臭いだった。

「あの絵を見せてくれよ」僕は頼んだ。「随分長いこと、見ていない」

容子は黙って頷くと、銀色のクリップを一つ一つ外しにかかった。最後のクリップが外れ、『雲雀』は再び外の世界へ躍り出た。

僕はまず、容子の小柄な体が、異常にこわばるのを目にした。そして、彼女の華奢な背中越しに、その作品を見た。

思わず目を背けたくなるほどに、それは酷い有様だった。

容子の『雲雀』は、無残に汚されていた。黒褐色とも、鈍色とも、暗灰色とも、表現し難い醜い色。そんな汚らしい色で織り成された模様が、卑劣な投網のように容子の絵を満遍なく覆っていた。

単なる悪戯にしては、余りにも作業が細かく、また念が入っている。鮮やかなブルーの空に浮かぶ純白の雲。絵の魂であった筈のその部分が、ヘドロの海に浮かぶ嫌らしいピンクのクラゲと化している。僕はその滲んだようにだらしない色を見ながら、嘔吐感すら覚

えていた。
一体誰が、これほどに昏い情熱で、容子の絵を汚した？
何の為に？
僕は言葉もなく立ちすくみ、恐る恐る容子を見た。その時の彼女の顔を、どうしても忘れることができない。あんなふうに鮮やかに人間の顔色が一変するのを見たのは、後にも先にもあの時だけだ。
容子の顔は、みるみるうちに蒼ざめた。細い肩が小刻みにふるえだし、怯えたような瞳がすがるように僕を見た。と思う間もなく、彼女は体を翻し、いきなり駆け出した。
なぜ、あの時僕は容子を追わなかったのだろう？後でそう何度か自問した。彼女を捕まえ、抱き寄せ、顔を覗き込んでいたら。果して何かが変わっていただろうか？
いや、何も変わりはしなかっただろう。容子は走り去った。S先輩の元へ。きっとそうなるだろうという予感があったから、僕は彼女を追えなかったのだ。
そしてそれきり、容子は絵を描くことをふつりとやめてしまった。

「俺は青い鳥を捕まえたよ、幸せの青い鳥をな」
桜もすっかり散った頃、S先輩はわざわざ僕にそんなことを言った。その時、僕の胸に暗い疑いの影がさした。
（なあ、おい。あの子をイーゼルの前からひっぺがすには、どうしたらいいと思う？）
かつての彼の陽気な慨嘆が、頭の中でこだました。どうしたらいい？　どうしたら？
最も効果的な手段があったではないか。効果的で、決定的な手段が。そしてそれは、実行された……？
僕は懸命に首を振った。何の証拠もない。それは卑怯な中傷でしかない。
だが、いったん生じた疑惑は、容易に去ろうとしなかった。それは容子の作品を汚した絵筆にも似て、僕の心に暗い蜘蛛の巣をこしらえてしまったのだ。
汚されたブルー。手の中に捕らえられた小鳥。もし、両者の間に何らかの繋がりがあるとしたら――。
「どうしたんだ？　ぼんやりしちまって……」
二本目の煙草を灰にしながら、S先輩が言った。しかしそう言う彼自身、随分長い間、ぼんやりしていた

ものに違いない。二人して顔を見合わせて笑い、気まずくなりかけた空気を追いやった。
「なあ、おい」
彼は以前と変わらない口調で、言い出した。「容子のことなんだが、さっきは誤魔化して悪かったな。ここんとこちょっと、調子よくないもんでさ」
僕は驚きに目を見張った。
「彼女、病気なんですか？」
「いや、そういうわけじゃなくて……」S先輩はしばらく言い澱んだ。「最初の、赤ん坊がな、駄目になっちまったんだよ。ひと月ばかり前の話だけどな。体の方はもう心配ないんだが、精神的に、何て言うか……ここんとこずっと不安定なんだよ、あいつ」
「それは……」
そのまま言葉が続かない。ひと月前。彼女が電話をかけてきた時期と、ぴたりと一致する。
（私、殺されたの……）
彼女はそう言っていた。死んだのは、お腹の赤ん坊だった。
「最初はもう、見ちゃいられなかったよ。やたらに自分を責めるんだ。自分のせいだ、自分の不注意のせいだってね。幾ら仕方がないことだったんだって、言い聞かせても、駄目なんだよ。死んだ子供のこともそりゃショックだったけどな、それ以上にあいつが可哀相でさ、たまらなかったよ」
胸につかえた苦いものを吐き出すように、彼は言った。まるで別人を見るような思いで、僕は相手を見やった。
「今も、そんな感じなんですか？」
だとしたら、そんな容子を一人切りにしていい筈がない。だが相手は晦い目をして、いいや、と首を振った。
「余計悪いね。やたらと陽気に振る舞うんだよ。浮かれ過ぎているくらいにね。それが、無理してるのが見え見えでさ、痛々しいんだよ。今日もそんな感じさ。いたたまれなくなって、飛び出してきたんだ」
そして、あいつの為には今は側にいない方がいいんだよ、と付け加えた。吸いさしの煙草が、いたずらに灰になっていく。我が子の為に、一時はやめた煙草……。
「なあ、おい」
茫然と黙り込む僕に、彼は先刻と同じ言葉を投げた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.